

1. 教員から

■ 谷口 純一 特任教授

今年度の4月から私が「地域医療・総合診療実践学寄附講座」の特任教授を拝命し、引き続き、大学に設置された「地域医療支援センター」の副センター長として、同センター業務と、それ以外の従来取り組んできた内外の業務とを、バランスを取りながら、整合性をつけつつ、業務遂行を行なったつもりです。しかしながら、新型コロナウイルスの影響も大きく、地域医療機関への訪問は、今年度は、ほとんど出来ず、業務の方向性もコミュニケーションの困難さに直面いたしました。

具体的には、寄附講座、地域医療支援機構における、自分の活動として、特に、

- 1) 県内地域医療機関関係者への訪問、面談と分析・対応検討
- 2) 総合診療専門医の養成に関する企画・立案
- 3) 地域医療関連の卒前教育の実施
- 4) 修学資金貸与制度の制度運営の実施と整備
- 5) 地域医療機関への診療・教育支援
- 6) その他、機構関連諸業務(運営会議、連絡調整会議、理事会、等)

また、寄附講座、機構業務以外の、個人的な大学内外業務の方は、

- 1) 大学病院総合診療科外来診療、及び、救急外来診療
- 2) 医学部医学科の卒前教育での地域医療以外の複数の授業・実習
- 3) 大学卒前医学教育の横断的な業務補佐
- 4) 卒後初期研修・専門医研修(総合診療)の指導・プログラム管理補佐
- 5) 学外の様々な依頼業務(共用試験実施評価機構委員、臨床研修指導医養成ワークショップ、看護特定行為研修関連、等)
- 6) 学会等の各種委員会活動(熊本総合診療研究会の運営、内科学会専門医部会、日本専門医機構総合診療専門医部会、など)

に取り組んだつもりです。

上記業務は、一定の成果が上がったと思われませんが、これから更に充実・整理させていく、或いは新たに取り組むべく必要性のある部分もあります。しかしながら、地域医療や総合診療専門医養成に関する、企画立案、交渉を行っても、意思決定のプロセスで困難を感じる事も多く、運営の困難さにも直面しております。この為、次年度は、多方面にご迷惑やご心配をおかけするかもしれませんが、可能な限り、診療業務、地域医療支援、総合診療医の養成、卒前の医学教育の充実、等に向け、自部署関連の協力体制を変化させ、外部のご理解・ご支援を更に活かせる様に取り組んでいく所存です。

■ 佐土原 道人 特任助教

地域医療・総合診療実践学寄附講座に赴任してまる4年が経ちました。本年度は一部人事異動がありますが、私はそのまま留任でお世話になっております。診療支援先は、昨年に引き続き蘇陽病院、新規で公立多良木病院にお世話になりました。今年度は、研修医とあまり現場での指導の接点がありませんでしたが、多良木病院では、専攻医向けにカンファレンスを行い、専攻医に直接指導する機会を得ました。昨年度の夏季地域医療特別実習は台風で1日短くなり、今年度の夏季地域医療特別実習はコロナ禍で延期、冬季地域医療特別実習として規模や参加人数を小さくし、感染対策を十分して再計画しましたが、第3波の影響で断念となりました。コロナ禍で、学習形態や人の移動や距離、医療アクセスや働き方が変わる中、地域に赴いて、現場を見て感じるための新しい実習方法を模索しなければなりません。

コロナ禍で、出張は激減し、これまで行ってきた臨床研修指導医講習会は減少、看護師特定行為指導者養成講習会もオンライン併用の工夫、看護大学院の実習授業も感染対策を厳重な上の実施と、例年がない影響がありました。学会発表の機会は減りましたが、余った時間で、英語論文を終筆して2篇アクセプトされました。

今年度は、科研費の最終年度ですので、成果をきちんとまとめたいと思います。また、総合診療専門研修の専攻医が初めて修了する年ですので、来年の専門医試験に向けての修了判定を滞りなく行いたいと思います。

今後ともよろしく願いいたします。

■ 後藤 理英子 特任助教

コロナは男女共同参画推進活動に良くも悪くも影響しました。良かったことは各学会、会議がWeb上で開催されたこと。これまで育児で十分に参加できなかった学会にも参加でき、会議のための移動時間が減り、時間の余裕が出来ました。悪かったことは、男女共同参画推進の活動そのものが後回しにされがちであったこと。年度末が急激に忙しくなりました。コロナはこれまでに燻っていた様々な課題点を浮き彫りにしました。また同時に人の温かさに感謝した1年でもありました。アフターコロナでは、属性に関係なく全ての医療人が働きやすく活躍できる環境が整うよう、今後も粛々と多様性推進を支えていきたいと考えています。

■ 高柳 宏史 特任助教

2020年度における自分の時間配分は、

【診療】= 2

【教育】= 3

【研究】= 0

【組織】= 1.5

【学会】= 0.5

【家庭】= 2

【睡眠】= 1

といったところでしょうか。個人的には、【研究】への配分ができるようになればよいと思いますが、自分ではどうしようもないことで時間がとられているようにも思います。2020年度は、新型コロナウイルス感染症によってたびたび学生への教育的な方法が変更になりました。幸いなことに大学病院や医学科でクラスターが発生することなく1年間を終えることができたのはとてもよかった事です。新型コロナウイルスのワクチンが驚くほど早期に開発され供給されたのは驚きました。その一方で、集団免疫が効する接種率が低く見積もっても60%だとすると、その域まで達するのはさらに1年は必要ではないかと思われる。早く、マスクを外し、みなで労をねぎらうような会食をしたいものです。

あと、2020年度では、また熊本で大きな災害が発生しました。球磨川流域を中心とした令和2年7月豪雨災害です。被災地域はいまだに復興の最中にあると聞きます。少しでも2021年度は多くの人に笑顔がみられる年でありますように。

■ 田宮 貞宏 玉名教育拠点指導医(くまもと県北病院 副院長/総合診療科)

振り返ると今年度は日常診療・教育を積み重ねて玉名拠点・総合診療科を発展させていくといった、これまでのスタンスを踏襲するには難しい時間が続いた印象です。一大事業である病院の統合・移転・新病院開業を3月に控えるなか、予想を遥かに超えるコロナのパンデミックの影響が玉名拠点・総合診療科にも通常とは異なる業務の増加や教育の機会の減少といった形で現れました。この逆境の中で玉名拠点・総合診療科のスタッフは様々な要請に応え、病院の難局を乗り越える原動力になってくれました。頼もしい仲間がいつもそばにいてくれることに感謝いたします。

コロナ禍や病院統合移転・開業では診療科、各部署間の調整に加え、院外の施設、団体との協働が重要となりますが、これは一朝一夕にできるものではなく、日常診療(平時)の際から診療スキルのみならずコミュニケーションスキルを磨き、積み上げられてこそ機能するものです。診療体制の変容が必要な際にあたかもコロナウイルスのスパイク蛋白に変異が加わり感染性が変化するように、玉名拠点・総合診療科が様々なニーズに柔軟に対応することで病院や地域のレジリエンスが強化されることを実感しました。平時も有事も目的を見失わず、原理主義に陥らず、柔軟な行動をとれる組織づくりと、それを実現するための診療スキル、コミュニケーションスキルを意識して教育に携わっていきたいと思います。

■ 小山 耕太 玉名教育拠点指導医(くまもと県北病院 総合診療科部長/総合診療科)

「ゆっくりだけど、確実に前進」

熊本大学に帰還して8年目、教育拠点に赴任して7年目に突入しました。私は当初から冒頭の言葉を常に口にしてきました。これは、常に自分が周囲の人・組織・地域に役立つ存在であるという、他者評価を得られているか、自問する目的に発する言葉です。

昨年の年次報告書で、私は玉名地域の診療と、熊本県の総合診療教育を牽引する総合診療科を、これからも発展的に展開することお約束しました。以下、達成した事と、未達を列記します。

<達成>

- ①これまでの病院総合医としての業務に加え、家庭医としての訪問診療業務を開始。
- ②救急外来宛の紹介患者トリアージ業務(午後診)を開始。
- ③消化器内科とコラボして、上部消化管内視鏡検診業務の研修を開始。
- ④COVID-19入院診療への参画。

<未達>

- ①上記①の病院収益に対する業務改善について具体化。
- ②働き方改革の具体化。
- ③研究業績の積み上げ。

「善きことはカタツムリの速度で動く」

マハトマ・ガンジーの言葉です。冒頭の言葉の元になったものです。焦るつもりはありませんが、今年度は上記未達を少しでも達成すべく、また、新たな課題も抽出しつつ、ゆっくりだけど、確実に前進する所存です。

どうか、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 鶴田 真三 特任助教(天草教育拠点/天草地域医療センター 総合診療科)

天草地域医療センターでの2年間が終わりました。個人的には、2年目になると、だいぶ病院勤務にも慣れたように思います。また、時間が長くなる分、継続的にかかわる患者さんも増えました。個人的な診療としては、患者さんからのありがたい言葉をもらうことも1年目より増えたことが、やりがい、普段のモチベーションになっていました。ささやかながら在宅医療も行い、3名の在宅でのお看取りにも関わらせていただきました。

施設としては、スタッフ不足、専任医不在、学生も少なく、教育拠点としての役割も寂しいものだったように思います。特にはじめ7か月はスタッフ2人体制で、診療をまわすことで精一杯でした。

ありがたいことに医療センター総合診療科としての地域や院内からのニーズは確実にあると感じます。しかし、求められるパフォーマンスを維持し、そのうえで教育も充実させていくには、ある程度のマンパワーが必要です。現実的には総合診療科医師はまだまだ不足しており、天草に人員が充足することは難しいと思います。医療センター、大学の先生方、地域、市、県など様々な方々にご協力してもらいつつ、今後も総合診療科医として天草でのかかわりをどうしていくかを考えていきたいと思っています。

私は医療センターの常駐ではなくなりますが、これからも天草の一員として頑張ります。これからもなにかとご協力、ご理解の程、よろしくお願いします。

■ 松本 朋樹 特任助教(天草教育拠点/天草地域医療センター 総合診療科)

天草拠点に来て、あっという間の一年間でした。

「実家の継承を見据え、天草に戻ってきたい」という突然の希望を聞いてくださった教授はじめ先生方には感謝しかありません。

振り返ってみると、2020年度、天草拠点では外来患者864名、救急患者389名、入院患者308名の患者さんたちを診療していました。

年末まで医師2名体制に減員してのスタートでしたが、医師あたりの診療患者人数は一昨年よりも上昇し、高いパフォーマンスが維持できたかと思っています。

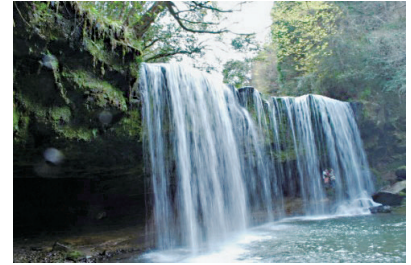
今後も、地域のために貢献を続けることが出来るよう研鑽を続けていきます。

今年度の目標は「地域に開かれた総合診療科にする」ことを目標に、多職種連携や地域医師会との連携を強めていきたいと考えています。

地域のために何が出来るか、組織のために何が出来るか、ひたすら探求し続けていく一年にしようと思います。

■ 片岡 恵一郎 客員研究員(小国公立病院 病院事業管理者)

2018年度より、松井先生と谷口先生のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、月に1回地域医療支援センターのミーティングに参加させていただいております。今年度は新型コロナウイルスの関係で、ミーティングに参加できない月もありましたが、大学で触れることのできる情報は、地域にどっぷり浸かっている日常とは異なった視点で地域医療を俯瞰的に見ることができ、自分にとって大変貴重な時間となっております。



小国郷は小国町と南小国町併せて約10,000人の地域です。このコロナ禍で感じている事は、この10,000人という数は、コミュニティとして理想的な数なのではないか、という事です。

少し前に流行ったサピエンス全史という本に、「ホモ・サピエンスはフィクション(ストーリー)を生み出しそれを共有することで、力を合わせる事ができる様になったので、地球を支配できる様になった」という記載がありました。これまでのコロナ禍(第3波まで)で小国町・南小国町の感染者数が県内でもトップクラスに低かったのは、地形的にゾーン分けされていることでもあります。迅速なストーリーの共有ができる人口規模である事は大きな要因の1つではないか、と考えています。この10,000人のコミュニティの規模であれば、地域の医療やケアのストーリーの共有も比較的容易であり、住民主体の地域医療を構築する上で、かなり有利な条件が整っていると言えるでしょう。

2021年4月より、私は病院事業管理者という小国郷の地域医療のストーリーを語る立場になります。大学で触れることのできるグローバルな知見をベースに、町で暮らす人達の生活をしっかり見て、地域に適切なストーリーを語れるよう、知識と経験を積みあげていきたいと思っています。

2021年度は、学生さんや研修医の先生が地域医療や総合診療について体系的に学べる環境を、病院として整えて行きたいと思っています。多職種連携がうまくいっている地域包括ケアシステムのモデル地域の1つとして、質を担保した研修ができる様、環境を整えていきたいと考えています。

■ 古賀 義規 客員研究員(御所浦診療所 所長)

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の1つです。今年度は空田専攻医に赴任して頂き、総合診療科医師2名による常勤体制となりました。例年通り医学生実習を受け入れましたが、COVID-19感染症流行中の今年は幾分異なるものでした。離島は感染症の流入には敏感な地域であり、医学生実習の受け入れ直前にPCR検査で陰性確認して頂いていたのは島民の安心感につながったと思います。一方で上天草で企画されていた夏季実習の一部を御所浦でも受け入れる予定だったのですが、COVID-19感染拡大のため中止となり、さらにその代替案として企画された御所浦地域主体の冬季実習も流行再燃のため直前に中止となりました。企画準備に携わって頂いた大学関係者の皆様、参加予定だった医学生の皆様、受入準備をしていた島内関係者全員がコロナに振り回されました。



ところで令和3年度は新たな内科と歯科の複合診療所が竣工予定です。「地域で働く医師は地域で育てる」ことの重要性を、熊本県や上天草市にご理解いただき、研修医や医学生のための宿泊施設も併設されることになっています。

今後も、県や大学と連携しながら、より多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助になりたいと思います。

■ 中村 孝典 上級医

2020年度は前年から引き続き玉名中央病院の総合診療科で、一般外来、救急外来、病棟業務を行いながら、医学生、初期研修医、後期研修医の指導を行いました。

業務的には前年度から大きく変わることはありませんでしたが、草野先生が新たに総合診療科に来られたことで診療も教育も今までよりパワーアップすることができました。

個人的な感想としては、covid 19感染拡大による医療現場への影響だけでなく、2021年3月の新病院への引越に向けて当科の小山部長、田宮副院長が関係各所と繰り返し小まめに調整を行っていた姿がとても印象に残っています。

また私ごとではありますが2021年に第二子が誕生いたしました。前述の通り上司はとて多忙でありましたが、妊婦検診や出産のため職場に迷惑をかけることも多々ありました。後期研修が終わり、上司をサポートしなければいけない立場でしたが診療や教育の面でサポートすることができず科に迷惑をかけたこともあったかと思えます。ただ上司や同僚、後輩達が優しく対応いただきとても感謝をしています。

改めてこの一年を振り返ると感謝と反省の二文字が残ります。恩返しはもちろん、この一年で自分が恩を受けたように今度は自分が他人のために働けるよう精進していきたいと思えます。

■ 武末 真希子 上級医

2019年度に帰熊し、玉名拠点と、2020年11月からは天草拠点で勤務させて頂きました。家庭医療専門医プログラムの後期研修中は、内科急性期管理を集中的に行う機会は少なかったため、勉強になった2年間でした。玉名では膠原病関連の診断、治療に関わることも多く、苦手分野の経験を積めたことが財産となりました。天草では、土地特有の疾患や、熊本市内の大きな急性期病院の受診のハードルが高い中での診療など、天草特有の医療について学ぶことができ、勉強になりました。

来年度以降の方向性を考える中でクリニックの見学をした際に、地域へのアプローチの工夫を色々な角度からされている話を聞き、とても勉強になり、その熱意にも刺激を受けました。来年度は診療所で勤務させて頂き、家庭医として、より地域に密接した診療や、小児など幅広い診療について、更に経験を積みたいと考えています。社会人大学院という形で研究にも携わっていこうと考えており、様々な場での診療経験を活かし、研究や後進の指導という形で還元していけるように頑張ります。今後ともよろしく願いいたします。

■ 松田 圭史 上級医

今年度は家庭医療専門医試験を受験する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で試験が延期となりました。昨年度に引き続き小国公立病院での勤務でしたが、今年度は新型コロナウイルスの対応に追われた1年であったように思います。その中で一医師として新型コロナウイルスの診療を行うだけでなく、病院としてどのような役割を担うか、住民に対してどのように情報発信を行うかなど、より広い視点で関わることができたのはとてもよい経験となりました。新型コロナウイルスをきっかけに時代が大きく変わり、今後も目まぐるしく状況が変わっていくことが予想されますが、総合診療医としての役割を日々考えながら、よりよい診療を実践できるよう努めていきたいと思えます。

2. 事務から

松岡 大智

地域医療支援
コーディネーター

今年度は「コロナ」に明け暮れた1年でした。これまでの生活様式が見直され、いろんな「新しい日常」が生まれた年でした。

そんな中、セミナーや面談も移動を伴わない「リモート会議」の開催が多くなり、パソコンの前に座ったまま、他人と顔を合わせ、大勢の人とそこにいるような感じでお話をする、初老のおじさんが昔読んだ想像の世界を現実を経験するという何か不思議なことが起きた1年でした。

新しいことに手を出すことに億劫になりストレスを感じるおじさんも、そのうち何とか抵抗なく操作できるようになりました。若い時には時々のトレンドに柔軟に対応できているつもりで、ワープロも使わないおじさんを見て不思議な気がしていました。でも今、自分も新しい機械に戸惑うおじさんであることに、はたと気が付きました。IT時代の新しい日常はおじさんには「やをいかん」ことを実感しています。

若杉 秀作

地域医療支援
コーディネーター

2020年4月より、地域医療支援センターにて勤務しております。

本年度は、正にコロナウィルス感染症の真ただの中、様々な事業の取組みが制限せざるを得ない状況となったことは残念でなりません。

さて2021年度、コロナウィルス感染症の影響は、まだまだ予断を許さない状況ではありますが、昨年度の経験を踏まえ、工夫をこらした事業の取組みを展開すべく、微力ながら頑張っています。

2年目となる私が意識することとして、「熊本県医師修学資金貸与制度」に基づき貸与を受けている学生、医師の皆さんへ、「医師としての10年後、20年後の青写真を描いていただき、県下医療機関にて活躍いただきたい」と、そのためにも、地域医療に関する認識を深めていただく取り組みを継続的に発信していきたいと思えます。

高塚 貴子

女性医師復職支援
コーディネーター

あっという間の1年でした。コロナの影響で年度初めは予定のセミナー等が中止となり、相談に関しても求人に関する医療機関からの問い合わせが大幅に減少しました。話し合いの為に訪問したとある医療機関では建物に入る毎に検温と手指消毒が徹底され、とても厳重に感染対策がされていたので、なかなか医療機関に訪問するのにもためらう1年でした。しかし、地域医療支援センターでもZOOMが導入され、オンラインでのセミナーや面談ができるようになり、今までとは違った様式で事業を遂行することができました。

早くコロナが収束して皆が穏やかな日常に戻れるよう願います。

山並 美緒

こちらにお世話になり5年が経ちました。「ピンチはチャンス」と言いますが、今年度はこの言葉を身に染みて感じた1年でした。

新型コロナウイルスの影響で例年通りとはいかず、業務が大きく変わり、Web講義、Webセミナーの設定から配信、オンライン申込みやアンケートの集計、感染対策を徹底しての対面実習の企画・準備(結局中止となりましたが…)など、平常時にはなかなか経験できない新たなスキルが多く身に付きました。

また、緊急事態宣言時の小学校休校の際は、仕事と育児との両立が難しく、勤務時間を調整していただきなんとか乗り切ることができました。その際は先生方、事務の皆様にはご迷惑をおかけしました。この場をお借りして御礼申し上げます。しかし、そのおかげで「一人で出来ることには限界がある。周りに頼ることも必要」という生きていく上で大切なことに気づくことができました。ありがとうございました。

学んだことを活かし来年度も陰ながら皆様のサポートを頑張りたいと思えます。よろしく願いいたします。

山口 香

今年度は新型コロナウイルスという未だかつて経験したことのない感染症の流行によって、当講座としてのイベント、学会参加、実習、講義等々、あらゆるものの変更、中止を強いられた1年でした。私が担当させていただいた特別臨床実習(クリクラ)総合診療科、地域医療ゼミ、講義等は中止になることはなかったものの、その多くが学外に行けず院内実習に変更になったり、オンラインでの実施になったりと、ご担当の先生方を始め、事務もコロナ禍に対応するための準備に振りまわされた年だったように思います。ただ、ECEⅢでは、こういった状況においても、出来る限り学生教育に協力したいという想像を超える数の施設の先生方にご協力頂けたことは大変感動致しました。また、地域医療ゼミでは、熊本豪雨で被災されながら診療を継続された先生方のお話や認知症のご家族との生活の実体験のお話しなど、多忙な遠隔地勤務の先生方や他業種の方を講師にお招きできたことは、Zoom等を利用したオンライン開催での利点であり、参加した学生にとっても有意義な時間となったように思います。

日常を取り戻すまでにはもう少し時間がかかりそうな状況ではありますが、この状況下で学べることも多いと思います。一日も早い収束を祈りながら、今すべきこと、出来ることを私なりに考えて、来年度も前向きに頑張っていきたいと思います。

大西 留美

地域医療支援センターの事務補佐員として、昨年2月から勤務しております。業務に携わるなかで、地域医療の現状やその改善に奮闘する先生方・職員、将来貢献しようと頑張る学生さんの存在を知り、微力ながらお手伝いさせていただきました。コロナウイルスの影響で、講演会やセミナーの開催形式がオンラインになり、戸惑う事ばかりの一年でしたが、皆様に助けられ貴重な経験をさせて頂きましたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

横手 友紀子

1年前、新型コロナウイルスに関するニュースが国内でも取り上げられ始めた頃、その影響により、今まで「当たり前」にあると思っていた日常が“あたりまえ”でなくなってしまうなどとは、少しも想像していませんでした。

例年、医学生や地域の医師へ向け開催している講演会やセミナー、ふるさと実習等の事業は、実施を見合わせざるを得ない状況にありましたが、Web配信システムの導入により、少しずつ再開されてまいりました。また、それは県外や県内でも遠方にお住まいの方からも講演会等に参加いただけ、なかなか発信できていなかった地域にも届けることができ、このコロナ禍が転じてプラス(福)となりました。(ふるさと実習の再開は、まだ少し先になりそうですが...)

まだ、以前のような日常を制限される日々には慣れることができず、少し息苦しさを感じることもありますが、この状況を上手く付き合い、利用しながら、これからも熊本県地域医療支援機構ならびに地域医療支援センターの活動がより良いものとなり、皆様に寄り添えるよう、この事業を精一杯サポートしてまいりたいと思います。

3. あとがき

2020年度は、COVID-19(新型コロナウイルス)のパンデミックで、日本のみならず、世界中が大きな災難に見舞われ始めました。世界的に医療の現場もその対策に追われ、熊本県の地域医療機関にとっても、苦悩に満ちた年となりました。

その様な中で、2020年度の私ども「地域医療支援センター」の活動をご報告させて頂きました。設置から7年目となり、今年度は、新たに、私どもの熊本大学病院の「総合診療科」、「地域医療・総合診療実践学寄附講座」の体制も変わり、「玉名拠点」、「天草教育拠点」も苦労しながらも、体制を維持し、地域医療に貢献しながら、人材養成をする事が少しでもできたのでは無いかと感じております。次年度2021年4月からは、新たに「河浦拠点」を新たに設置し、総合診療専門医養成を行う体制を更に整備しつつ、地域医療に貢献できればと願っております。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で、熊本大学医学部医学科の授業・実習も多大な影響を受けましたが、地域枠学生に対して行っている、「地域医療ゼミ」もかなり縮小してWebで実施となり、現地を訪問して行う、「地域医療特別実習」は中止となり、地域医療の学びの貴重な時間が限定される状況となりました。しかしながら、2022年度からは、入試制度が変わり、地域枠入学者が5名から8名と増える予定となっております。今後、県の修学資金貸与制度の卒業生がますます地域の医療機関に出ていく事が増えて参りますが、専門医修得のための「キャリア形成プログラム」も整備・提示でき、それを補完する「総合診療特別プログラム」も提供する事ができました。今後、地域貢献とキャリア形成を更に充実させていく方策を進めていきたいと思っております。

男女共同参画事業も「熊本県女性医師キャリア支援センター」として、地域で働く若い女性医師のサポートをしつつ、県全体で女性医師の活動を支援する活動を、地道に着実に続けておりますが、少しずつ成果も出てきていると思われまます。こちら、より一層のご理解を賜りたいと願っております。

次年度も、引き続き、熊本県とも更に協力して「地域医療対策協議会」の実施・運営や、「熊本県地域医療ネットワーク構想」の遂行に協力し、熊本県の「第7次保健医療計画」の実現に微力ながらお役に立てればと願っております。

最後に、谷原病院長・機構理事長を始め、大学内の様々な先生方、事務方等には多々ご指導・ご支援頂きました。また、当地域医療支援センターの事務部門のスタッフの方々および、県庁の医療政策課の方々にも、多大なるご助力を頂きました。本年度も地域医療の貢献の為にご理解頂いた全ての関係者に、あらためて、一層の感謝を申し上げますとともに、次年度もどうか宜しく願い申し上げます。

地域医療・総合診療実践学寄附講座／地域医療支援センター
谷口 純一

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5627 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学専攻講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5794 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/



令和 2 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

